

「市民力」「地域力」とともに広げる 救命の輪 ⑦

(最終回)

市民・事業者・医療機関・消防
全ての総合力で「救命できるまちづくり」を目指して

豊中市消防本部指令情報課

今月は平成25年4月、豊中市消防本部 指令情報課に発足しました「119救命サポートチーム」について紹介します。

●指令室の勤務環境について

当市では、コンピューター制御による隊編成、出場指令などを行う指令管制システムを昭和57年6月1日から導入し、現システムで4代目となり指令室としても先進的に取り組んでいます。

119番の受信については、NTTの固定電話、各種IP電話、携帯電話からの通報、災害時要援護者が緊急時にワンタッチで通報できる「緊急通報システム(ホットラインきずな)」、聴覚又は言語等に障害のある方が通報できる「聴覚障害者専用災害ファックス」及び「メール119通報システム」を導入しています。

119番受信においては、通報者の位置情報を即時に確認できる「統合型位置情報システム」により、NTTの固定電話とIP電話は全ての通報者の位置情報がわかります。

また、GPS機能が搭載された携帯電話からの通報は、屋外で通報者が災害発生場所の住所がわからない場合でも、ほぼピンポイントで通報者の位置情報を知ることができます。

このことから、出場場所の特定が早くなり、受信から指令までの時間が短縮されるとともに、事故概要の聴取に専

念でき、より有効な情報を救急隊に提供することができます。

また、現在、各署所への指令放送は、音声合成により行われており、このシステムは、平成11年度から導入されています。それ以前は、通報者との交信が終わり、電話を切った後、自分の声で指令放送を行わなければならない、通報者との交信をできる限り短縮して、迅速な指令に主眼を置いていましたが、この機能により指令をしながら、通報者から情報を聴取でき、心肺蘇生法の口頭指導も受信から救急隊の到着まで、中断することなく行えるようになりました。

●「119救命サポートチーム」発足の経緯

119番通報から救命のリレーが始まります。

多くの市民や事業者の皆様方に、救命の第1走者として、心肺蘇生法を実施し、第2走者(救急隊)へとバトンを渡していただくために、普通救命講習や応急手当普及員講習の充実を図っているところではありますが、もし、唯一のバイスタンダーが講習を受講していても「突然のことで動転してどうしていいか不安だ…」、あるいは「受講したことがないので、対処法がわからない…」そんな時には、119番を受信する指令管制員が心肺蘇生法の具体的なアドバイスをを行い、実効性のある心肺蘇生法を通報者に行っていただきます。

しかしながら、電話での心肺蘇生法の口頭指導は非常に困難です。そこで、JRC蘇生ガイドライン2010の変更等を踏まえ、救急現場で十分に経験を積んであらゆる状況において対応してきた、ベテラン救急救命士が直接口頭指導を行うことは、有効な解決策となります。

また、救急救命士でない指令管制員も同様に高度な判断能力と迅速かつ的確な口頭指導が行えることが必要であり、ベテラン救急救命士は、その研修を担うことができます。

従前から口頭指導については、大きな課題として取り組んできましたが、このたび、第1走者から第2走者へ必ずバトンが渡せるようにとの大いなる使命のもと「119救命サポートチーム」が発足しました。



「119救命サポートチーム」任命式

●「119救命サポートチーム」の活動

今回発足しました「119救命サポートチーム」は、119番通報を受信する指令情報課に属しており、「119救命サポートチーム」は救急救命士の資格を有し、救急業務の現場経験が豊富な職員で構成しています。

指令情報課には第1～第3指令管制係と第1～第3調査係の6係を置き、3交替制で勤務しています。人員は指令情報課長（毎日勤務）を含め36名が配属され、各指令管制係に「119救命サポートチーム」員は4名任命しています。

※通報者への直接口頭指導の実施と実効性の向上

通常の指令室勤務は、昼間帯は3名勤務しています。勤務員の1名は「119救命サポートチーム」員とし、119番通報の内容から情報を的確に判断し、重症度・緊急度の判定、ドクターカー出場要請の判断並びに救急隊が現場に到着するまでの間に、付近に居合わせた方、通報者などの関係者に対して適切な救命手当（応急手当）の口頭指導を実施しています。

また、あらゆる状況に応じて、通報者に理解しやすい言葉や口調で行い心肺蘇生法の実効性を高めています。

指令台には心肺蘇生法用の器具として、メトロノームを設置し、1分間に100回の確実なテンポによる胸骨圧迫を指導しています。当然のことではありますが、救急隊が現場到着するまで継続した口頭指導を行っています。

※救急隊への有効情報の提供

救急活動の質の向上のために、救急救命士の現場経験を活かし、様々な通報内容からの的確に現場状況を把握し、現場の救急救命士が必要とする情報を聴取することで、活動救急隊に有効な情報提供を行っています。

※「119救命サポートチーム」以外の指令管制員のレベルアップ

実際の119番通報受信終了時に、聴取内容の中に潜む重要な会話を紐解き、解説やアドバイスを行う実践的な研修を実施するとともに、その研修を活用して、通報内容のキーワードを抽出し、状況に応じた聴取方法を事前研修するなど、様々な場面を通し、全員が「119救命サポートチーム」となれるよう人材育成を行っています。

※医師によるアドバイザー制度

社会福祉法人恩賜財団大阪府済生会千里病院 千里救命救急センター 副センター長の林靖之医師が指導医として、各種救急事案についてのプロトコルの構築や再検討、口頭



指導医の林医師に指令システムを説明

指導の充実などに助言をいただくものです。

平成25年度の第1回目として、5月16日(木)13時～16時に指導医による「119救命サポートチーム」研修会を開催しました。

林医師とチーム員12名全員と指令情報課長の14名で行われ、指導医に指令室の概要説明を行った後、録音された実際の通報を聞きながら、内容の聴取の方法について、評価や改善点などの助言をいただきました。

また、当市が作成している119受信・口頭指導プロトコルについての改善点などの助言をいただき、119受信プロトコルの充実強化に活かし、次の研修会（研修会は年度内に3回実施）までに改訂し、実践してPDCAを行っています。

●おわりに

突然心臓や呼吸が止まった傷病者の命を救うためには、「市民による素早い119通報、一次救命処置（CPRとAED）」、「指令管制員による迅速な指令、適切な口頭指導」、「救急隊の行う、高度な救命処置と的確な病院選択」、及び「医療機関で行う救命医療」これらの要素が、迅速に途切れることなくリレーされなければなりません。

私たち指令管制員がこの「リレー」をつなぐ一端を担っていることを誇りに思うとともに、救命力の向上のため、知識と技術を研鑽し、「119救命サポートチーム」の取組をより良いものにする努力を重ねていく所存です。

筆を置くにあたり、改めて現状を見ると、それぞれの「命を救う力」が成長し、その結果として「尊い命が救われた」という成果もみられていることから、豊中市の「救命力」は着実に向上していくと確信しております。

（おわり）